

石井英也 編著

『景観形成の歴史地理学—関東縁辺の地域特性—』

二宮書店 2008年3月 271頁 6,000円+税

本論集は、2008年3月に筑波大学大学院人文社会科学部研究科を定年退官した石井英也氏（前歴史地理学会会長）が編者となり、同歴史地理学教室の大学院生が主体となった実習で実施した共同地域調査の成果論文をまとめて、編者自身による総論をつけた歴史地理に特化した地域モノグラフである。

石井教授は1987年に筑波大学内で地球科学系から歴史・人類学系に移籍し、草創期を過ぎた歴史地理学研究室を大きく育てあげた。在職期間中に刊行された成果は、隔年の刊行の『歴史地理学調査報告』の第4号（1989）から第12号（2006）までの9冊にわたる。那須野原（栃木県）、秩父（埼玉県）、銚子（千葉県）、三浦半島（神奈川県）の4地域で、本書の執筆者としてあがっているのは編者を除いて26名にのぼる。ただし、巻末にある上記9冊の報告書の総目次を見ると、本書にあがっていない執筆者（多くは当時の大学院生）は教員も含めて24名にのぼる。つまり総勢50名という数字は、石井教授の在職中に、教室から1年2.2人の大学院修了生を出した計算になる。このうち博士の学位取得者の数は不明だが、決して少ない数ではない。教室所属のすべての大学院生に対してこのような場を提供してインセンティブを与えると同時に、教室自体もこれらの実習調査を主軸に成長していったという点では、他大学の地理学の教室に類を見ない誇るべき特長である。

本文は9ポイント活字、横2段組でびっしりつまっているが、107枚にわたる図・写真、50の表が各論文に配されているため、さほどの圧迫感はない。しかもそれらが語る世界にこそ本書の神髄がある。

対象地域は首都圏の地方都市・地域であり、近世に江戸という政治中心からの影響を強くうけながらも、一定の距離ゆえに独自性をもった地域形成がなされた場所である。それは結果的に東京から東西南北に位置する「関東縁辺」であった。

本書は石井教授自身による総論が冒頭にあり、次のような構成になっている。

I 総論

歴史地理学における地域研究の視点

I 歴史地理学における野外調査の意味

II 歴史地理学における野外調査の留意点

1. 歴史地理学固有の調査法
2. 空間的観点と通時的考察
3. 地域全体のなかでの相対化と時代性考慮の必要性

III 地域変化とその構造

IV 関東地方縁辺部の歴史地理学

1. 那須野原、2. 秩父、3. 銚子、4. 三浦半島

このあとに各論として、4つの地域が、調査の早い時期から順に配置されている。先輩格にあたるOBでもある中西僚太郎、岡村治、三木一彦、山下琢巳、清水克志の5人による地域の概要が各地域モノグラフの冒頭に付せられている。

II 那須野原

1. 那須西原扇状地旧集落の生活様式の変遷—那須塩原市上横林地区を事例として—
2. 西那須野における開拓集落の変容と地域的特色—那須開墾社開拓地を事例として—

III 秩父

1. 小鹿野の町形成と商業の展開
2. 秩父山間集落の存立基盤とその変質—両神村を事例として—
3. 秩父大宮の都市形成と商業の変遷
4. 秩父の絹織物産業に関する一考察—江戸期から近代へ—

IV 銚子

1. 港町銚子の機能とその変容過程—とくに興野地区の特徴形成と他国出身者の役割に着目して—
2. 銚子飯沼地区における河岸の景観変遷と商業活動
3. 下総国海上郡高神村における紀州移民の動向
4. 漁業集落における家族就業構造と女性のはたらき—銚子沿岸集落を事例として—
5. 銚子市川口神社をめぐる漁業と信仰の変容

V 三浦半島

1. 三崎におけるマグロ漁業根拠地の形成と

商業活動の展開

2. 三浦半島南部における野菜生産地域の発展とその歴史的基盤—下浦を事例として—

この主要目次からもわかるように、近世から近代の地域事象の分析が本書の中心となっている。教室の教員構成や大学院生の関心、それに何よりも関東自体が近世以降の開発が中心となったという事情によるところが大きい。それは一面から言えば、古代歴史地理のように、地表面に現れた条里や古道、遺跡の復原・立地など分析する手法とはかなり異なる。未公開の地方史料の掘り起こし・翻刻、人口・家族や農業経営、生業形態、生活様式、商家が中心となる在郷町・宿場町・港町などの構成を、聴き取りや現景観、近代地図、古写真、神社の灯笼寄進者に残る形態から考察するという、多種多様な手法が駆使されている。結果的には歴史地理でよくとりあげられる城下町が含まれなかったことは、かえって関東の流通を介した狭域・広域ネットワークの特色を際立たせている。その一方で、考古学・文化財畑との交流は多くはなく、日本史との協力関係が顕著で、民俗学的関心も随所に見られる。

本書の執筆者は編者を除けば、学部・大学院で歴史地理学を専攻したという、通常の地理学教室よりもトピック、手法がより特化した調査が可能な環境にある。ただし、近世・近代主体の歴史地理学の特性として、まず資料の所在調査とその発掘が大前提となる。

評者の同僚の近世史研究者は、ひとつの旧家、あるいは博物館等に所蔵されている史料群の悉皆調査行い、それを整理して目録を作成、一部は写真撮影して所有者・地元へ還元するという、かつて多くの日本史ゼミや教室が学部レベルでもやっていた訓練が、大学院ですら全国的には行われなくなってきたという。大学院生と学部生、卒業生などが教員と一体となって、ひとつの対象について徹底調査するというこの伝統的スタイルは、地理学でも歴史学でも例外的存在になってきている現状は、大学院生数の増加に反して、学問の地力を萎縮させる方向に働いているのではないかと評者は危惧する。学生の関心の多様化、教員・院生の多忙という理由はあるにしても、成果がすぐにあらわれない効率の悪さも背景にある。しかしその地道な訓練によって、資料や地域を見

る目が研ぎ澄まされる。

その労を創設以来厭わずやってきたのが筑波大学の歴史地理学教室である。しかも成果報告書は簡易製本ではなく、しっかりした大学紀要のスタイルを踏襲した。連名・個人名での論文が中心となり、複数年にわたって一つの地域を調査してきたことも特筆される。少人数がなせる利点でもある。

学部中心の場合は、なかなか何年も同じ地域を連続してとりあげるのはむずかしいかもしれない。この教室では高等学校教員、研究者、博物館に関わる学芸員などをめざすという、進路・指向が比較的似通っている大学院生の構成によって、それが可能になった側面もあるだろう。

本書のユニークさは付録として、「大学院教育と野外実習」が別冊（退職記念事業配本に限定）としてつけられ、山本正三氏、大濱徹也氏と石井教授との対談が教室卒業生の司会で収録されている。実習の教育上の意義が東京文理科大学、東京教育大学時代のエピソードもまじえて回顧され、また筑波大学発足以降は、日本史・民俗学との協力的体制などが語られている。

近年、定年退職や古稀などの節目に教え子が中心となって献呈論文集なるものを出版することが目に見えて減ってきた。その理由の第一にあげられるのは、この種の論集は大部な割にテーマが分散し、昨今の厳しい出版事情で寄稿者が齷金したとしても、まず商業ベースでは割にあわない。第二にそれぞれの学問分野のスクールといわれる頂点にたつ教室が、多くの新興教室の台頭などで相対的に弱体化し、カリスマ的な教授が減ってきていることも否定できない。第三に、提出された論文を校閲・編集してまとめあげる献身的業務に従事することが、教員や教え子自体の多忙によって困難になってきていることもあげられよう。それらを克服して、ひとつのストーリー性をもたせた本を編集した石井教授をはじめ教室卒業生・修了生の労と、出版社の英断にまず敬意を表したい。

評者にとって、通時性を重視した地域調査は当然のことという思いがあるが、地理学は地表空間を扱うという史学との暗黙の棲み分けがある東日本の地理学の雰囲気なかでは、この通時性の重視は決して主流ではなかった。歴史畑ではエポックとしての年や時期で区切る論文はあるが、古

代・中世・近世・近代の時代の壁は意外と厚い。しかも、現代の若い人には、明治・大正はおろか、昭和戦前期もすでに書物でしか疑似体験できない社会である。最近の学生には、戦後の通時性すらどう教えるかも工夫がいる。

その意味からも、歴史学ではあまりやらない、限られた地域で、かついくつかのサブ地域をもった対象地を、比較的長いタイムスパンにわたって対象とする地域調査にこだわった、石井教授の控えめであるが芯の1本通った慧眼が見事に全編に貫かれている。

たとえば、IV編の銚子は、利根川河川文化と黒潮文化の接点、利根川東遷と東回り航路の開設によって栄えた町である。地形・水系変化、漁港開発、紀州移民からの移民による町立てなど、関西にないダイナミックかつ荒削りな歴史をもった土地柄でもある。しかし醤油醸造業や日本有数の水揚げを誇る漁港という現在の特色は、もともと存在していたものではない。すでに青木栄一氏が本書の書評¹⁾でも言及されているように、いずれの論文も、その地域の郷土誌を含んだ既往の研究の徹底的な探索により足らない部分を見出して問題を絞っていく手堅い手法は、教室全体の大きな遺産となっている。しかも、もともと銚子は、飯沼、新生、興野、今宮という利根川右岸4ヶ村が集落連担して形成された町であり、それぞれの出自・性格は異なる。

近世から近代への連続という通時性にまず焦点を絞る。さらに、それぞれの核となる集落の形態分析から入る。地籍図（法務局所蔵のものも含めて）のトレース図による地割の解釈、小字名、主要地物・地名の記入がまず共通して行われる。ここでの記入には、当然、地元の人々の聴き取り事項も加味されている。以下、古写真、絵図、統計、地方史料、地域図書館での探索、オーラルヒストリー、私的出版物、石造物などの記載事項の分析集計など、テーマに応じてさまざまな資料が実に柔軟に用いられている。はじめに「史料ありき」という史学の姿勢とは明らかに異なる。

銚子は戦災等で史料は焼失しあまり残っていない（醸造業だけは別）という先学のアドバイスを受けながらも、あえて地域のおもしろさでここを選んだという教室の総意としての地域観は、何よりも具象空間を重視する歴史地理学ではもっと尊

重されてよい。古代・中世の歴史地理の場合は、史料の制約があるだけに、復原の謎解きのスリリングさやロマンも伴い、王権とか都市理念、農地プランなどにも敷衍もできる。しかし、近世ではそういう創造力・構想力の占める割合は減じる。この共同調査は、地域を小さな単位に解剖していく、下方指向が信条であり、評者は「解剖学的歴史地理」とでも名付けたい。このひとつのスタイルを確立したことは、石井教授や教室の伝統の重みである。

あと一点の研究の特色は、結節地域的な考察（市、流通）や関係位置（立地）の重視、生業、産物・産業の重視（本書では野菜産地形成、地域商業、漁業など）、信仰なども扱う点で、これも、西日本のオーソドックスな歴史地理にはない特色である。しかも、その史料をわかりやすい歴史地理主題図として表現していることも重要である。逆に言うと、東日本は微地形と集落立地の関わりは、地形変化が大きいだけにもっといろいろなことがいえたのではないか。今後、自然地理、地形分類などはもっとどん欲に取り入れ、環境史、生態的な歴史地理への独自の接近を図ることが、史学へのアピールにもなろう。その知識技術習得の場として、関東エリアは関西よりも自然地理学を学ぶ場が多いだけに有利でもある。

地域博物館や自治体史の編纂業務は、これまでほとんど歴史学畑の出身者が中心であったが、評者はこれらの仕事は、歴史地理を学んだ者がもっと貢献すべき分野と考えている。そのためには、古地図・地籍図の整理とデータベース化、近世・近代史料をどう主題図化して、地域一般の人々にアピールするかが肝要である。資史料のデジタル化が自治体、地方史編纂では主流になってきただけに、歴史地理学でも、画像処理や製図、データベース作成にコンピュータ利用の頻度と重要性は格段に増えてきている。ただ高度なGIS分析の前に、地形図の正確な読み、資料の吟味、誤差の計測など、基礎的な考証にも、もっと歴史地理が幅をきかすべきであることは肝に銘じたい。

石井英也氏はドイツ留学中、ミュンヘン大学のルッペルト（K. Ruppert）教授に師事されたが、この調査報告にはヨーロッパの歴史地理学の近年の動向や方法論の影響は一見するとひじょうに弱い。氏は転向ともいえる筑波大学内での「移籍」

を真摯にうけられ、自らも新しいものを学ぶという謙虚な姿勢を貫かれたことも一因かと思う。氏も書かれているように、新しい動向を試験的にでも適用してみようという冒険は少なかつたかも知れない。ただし、銚子で「機関士」という近代漁業に関わる職業が地域の信仰とが結びつき、三崎市では、遠洋漁業の「仕込み」などの周辺産業へ注目するなど、ネット情報では決して出てこない、あぶり出された重要な事象の連関がこの本には散りばめられている。微細なまでに具象と位置にこだわり、地域事象・要素の相互関係を定性的に考察し、かつそれを主題図として地図にするプロセスは、よきドイツ地理学の伝統でもあった。その理念はこの編著にもしっかりと反映されている。

わが恩師でもある故・浮田典良教授は、われわれと『ジオパル21—地理学便利帖—』の編集作業をしていたとき、「論文に掲げられた主題図の例」として、定性／定量、点／線／面データごとの事例を最近の学術雑誌から探して掲載されているが²⁾、その会議の折何度か「最近は手本となるような図が少なくなった」と嘆いておられた。自らは、遺書となった『地図表現半世紀』³⁾で自分の描いた主題図の表現について反省・論評されている。その浮田先生からみればよき模範となるような主題図がじつに多いのも本書の特色である。図から地域のシステムを考えると、ドイツ農村・集落研究で培われた両人の共通の思考様式を見る思いがする。

筑波大学歴史地理学教室は石井英也教授の後任として2008年春に近代歴史地理学を専攻する中西僚太郎氏を迎えた。今後教室を主宰する立場にある小口千明氏は、誌名を『歴史地理学野外研究』と改称（巻号は継続して13号から始まる）され、「実習の成果のみにとどまらず、各人の問題意識にもとづく自主的な地域研究・調査の成果も収録したい」⁴⁾と抱負を述べられている。大学院生の発表の場の提供というのは、現在の全国大学院の状況を考えてとまったく妥当な判断である。ただ、完成された論文の量産はこの本にはふさわしくない。中間報告、資料紹介、インタビュー、「もの」リストなども含めた、さまざまな関心が饗宴する教室ならではの雑誌として育ててほしいという希望を述べて欄筆する。

(野間晴雄)

〔注〕

- 1) 青木栄一「(書評) 石井英也編著：景観形成の歴史地理学—関東周辺の地域形成—」地理学評論82-4, 2009, 356-358頁。
- 2) 浮田典良・池田碩・戸所隆・野間晴雄・藤井正『ジオパル21—地理学便利帖—』海青社, 2001 (4刷), 109-113頁。
- 3) 浮田典良『地図表現半世紀』ナカニシヤ出版, 2005。
- 4) 筑波大学人文社会科学研究所歴史・人類学専攻歴史地理学研究室『歴史地理学野外研究』13, 2009, i頁。